

藤

並

の

Vol. 35

(作家)

高知駅を淮急南風号で旅立つたのは、昭和三七(一九六二)年五月下旬。一〇〇七年のいまから振り返れば、はや四五年の昔ということになる。  
遠い昔、高知駅で親友ふたりと別れて、泣きべそをかきながら乗つた準急南風。蒸気機関車牽引の客車だった。

座席は木製で、向かい合わせの四人掛け。親友からもらった弁当を窓際におき、車窓の先をぼんやりと見ていた。土佐山田を過ぎるとトンネルが始まり、やがて吉野川が見えてきた。

小学五年生の夏休みに、林間学校で吉野川沿いの集落に泊まつた。思えば生まれて初めて母親から離れて過ごしたのが、あの夏の林間学校だった。

それから足掛け四年が過ぎた、中三の五月。わたしは高松に向かう準急の車窓から、ひとりで吉野川を見ていた。過ぎた四年を思い返すうちに、涙がとまらなくなつた。

車窓に向つて涙をこぼす中三の小僧を、放つておけなくなつたのだろう。向い側の年配者から、やさしい口調で問い合わせられた。  
「なんちやあないき」  
強がると、余計に哀しくなつた。

座席に座つていられなくなり、わたしは客車のデッキに出た。いまの電車とは違う。あの時代の客車のデッキ(乗降口)には、戸などなかつた。

六十を目前にしながら、いまだに列車に乗ると、バナナを探してしまった。

熟れ過ぎていて、皮の方々が黒ずんでいたバナナ。しかし味は優しさに満ちていた。

牽引する蒸気機関車が吐き出す煤煙は、後方に流れてくる。その煙が発するにおいが、いきなり濃くなつた。

きつい登りに差しかかつたのだ。機関車はおのれを叱咤するかのように、何度も汽笛を鳴らした。

## リレー随筆

## 熟れ過ぎのバナナ — 山本 一力



▲一般にも貸し出している茶室「慶雲庵」



▲一般にも貸し出している茶室「慶雲庵」

展覽會紹介  
Exhibition  
Introduction

# 「倉橋由美子 人と文学」展

平成19年  
1月14日(日)  
▼  
3月25日(日)  
企画展示室  
観覧料550円

「倉橋由美子 人と文学」展が始まりました。「倉橋由美子 人と文学」展開式は良い天気に恵まれ、二〇〇七年一月十四日(日)午前9時から高知県立文学館の二階ロビーで行われました。

今回は、開式式の様子とその後に行われた記念講演会についてご紹介したいと思います。

## ◆テープカット



高知県副知事の中西穂高氏の挨拶の後、著作権者の次女熊谷さやか氏からお言葉をいただきました。前日、倉橋由美子さんが愛した、牧野植物園を訪ね感動したこと、倉橋さんが生まれ育った高知で企画展を開催することができ感謝の気持ちでいっぱいであり、多くの皆様に展覧会をご覧頂きました。などの思いを語ってくださいました。

続いて、倉橋さんのご主人の熊谷富裕氏、今回資料を提供してくださった明治大学図書館庶務課長の飯澤文夫氏や積田正弘氏といった来賓の方々が見守る中、テープカットが行われました。高知県副知事 中西穂高氏、熊谷さやか氏、翻訳家 古屋美登里氏、歌人西岡瑠璃子氏、高知県立文学館 前田英博館長によって、テープにはさみが入れられました。テープカットの後、さやかさんの目に涙が溢れんばかり、とても印象的でした。生前、ご自分の展覧会など一切好まなかつた倉橋さんですが、今回の「倉橋由美子 人と文学」展覧会開催については、どのように受け取つてくださつているのか。そんなことを考えながら、展示解説を行い、来館者のみなさまとともに会場内をまわりました。

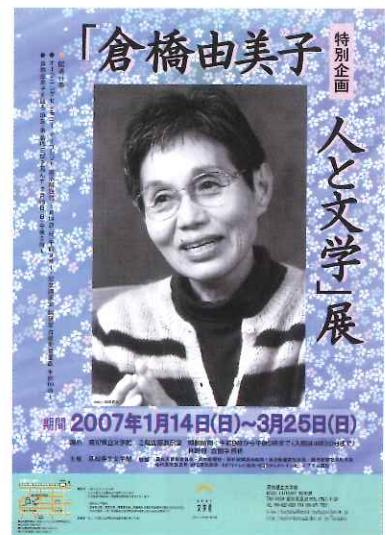
今回の展覧会は、「第一部 倉橋由美子 人と文学」、「第二部 倉橋由美子 文学」、「第三部 倉橋由美子さんを偲んで」そして、「倉橋さん、土佐を語る」と、大きくは4部構成で展示しています。

倉橋さんの文学については、明治大学における展覧会でも、取り上げられてきました。しかし、倉橋さんの人の部分については、これまで、紹介されることはありました。

本展では「人間 倉橋由美子」を紹介したいと、沢山の写真の中から650枚をご遺族に選んでいただき、その中から厳選した24枚を選び出し、パネル化し、所狭しと展示しました。元気な子どもの頃の写真やすこしふつくらした学生時代の写真、「バーチャル」でセンセーショナルなデビューをはたした頃の写真、原稿執筆中の写真、照れくさそうな結婚式の写真、二人のお嬢さんに恵まれて幸せそうな倉橋さんのようすが、写真でご覧いただけます。また、倉橋さんお気に入りの一枚の写真もパネルになりました。写真の裏には、倉橋さん直筆のメモ書きがあり、楽しく紹介させていただいています。



◆大盛況の展示解説風景



特別企画

会  
見  
展  
覽  
紹  
介

# 「倉橋由美子 人と文学」展

平成19年  
1月14日(日)  
▼  
3月25日(日)  
企画展示室  
観覧料550円



▲ 講演会風景

そして、午前10時からは、倉橋さんの30年来の友人であり、翻訳家として活躍している古屋美登里さんによる「土佐の女 倉橋由美子」と題しての記念講演会がおこなわれました。多くの聴衆者を前に、倉橋さんの創作への姿勢について「強い意志と実行力のもと自分の考えをきちんと形にする大人であり、人も厳しい仕事を要求するとともに自分にも厳しい人だった」また「『文章は、いつも楽しく書かなければならない』とおつしやっていた」と語り、会場は倉橋さんの人と文学一色に染まっていました。多くの皆様方のご協力の下、展覧会は始まりました。

厳しい人だった」また「『文章は、いつも楽しく書かなければならない』とおつしやっていた」と語り、会場は倉橋さんの人と文学一色に染まっていました。多くの皆様方のご協力の下、展覧会は始まりました。

（学芸課／津田加須子）

展覧会は、3月25日(日)まで、多くの皆様が倉橋文学にふれてくださることを願っています。

今回の展覧会では、関連事業として、2月11日(日)午後2時から、小、中学生による朗読げき「新訳 星の王子さま」～ぼくだけの花をさがしに～を開催します。全国大会でも度々上位入賞している土佐女子高等学校放送部の生徒さんの指導の下、只今、練習の真っ直中、当日が楽しみです。

また、17日(土)午後2時からは、文学館カルチャーサポーターの皆さんによる朗読の集い「倉橋由美子の世界」を開催、翌日には、倉橋さんの弟の装丁家倉橋三郎さんが来高、山田小学校時代の旧友の方々と思い出を語り、倉橋さんの好きだった音楽を生演奏でお楽しみいただきます。その他にも、2月10日(土)と3月11日(日)午後2時からは、倉橋さんが「老人のための残酷童話」を朗読されているビデオの上映。毎週土曜日、午後1時30分からは、担当学芸員が展示解説を行います。

今回の展覧会では、関連事業として、2月

## ■「倉橋由美子 人と文学」展関連企画のご案内 ■

### ・自作を読む(ビデオ上映)

平成19年2月10日(土)、3月11日(日)各日とも午後2時～

場所：高知県立文学館2階ロビー

内容：倉橋さんが自作を読んでいるビデオを上映いたします。

参加料：企画展観覧料が必要となります。(但し、2割引)

参加方法：当日、会場に直接おこしください。

### ・朗読げき「新訳 星の王子さま」～ぼくだけの花をさがしに～

平成19年2月11日(日) 午後2時～



場所：高知県立文学館1階ホール

内容：倉橋さん訳の「新訳 星の王子さま」を、子どもたちが朗読で熱演します。文学館初のリーディング・ドラマです。

入場：無料(企画展を観覧する場合、観覧料は2割引)

申込方法：お電話にてお申し込みください。(TEL: 088-822-0231)

### ・朗読の集い「倉橋由美子の世界」

平成19年2月17日(土) 午後2時～

場所：高知県立文学館1階ホール

内容：倉橋さんのベストセラーや土佐を描いた作品などを朗読でお楽しみください。

入場：無料(企画展を観覧する場合、観覧料は2割引)

参加方法：当日、会場に直接おこしください。

### ・倉橋由美子さんを語る

平成19年2月18日(日) 午後2時～

場所：高知県立文学館1階ホール

内容：倉橋三郎さんのお話と旧友による座談会。倉橋さんが愛した音楽の演奏もあります。

参加料：企画展観覧料が必要となります。(但し、2割引)

申込方法：ハガキ・お電話にてお申し込み後、当日会場にお越しください。

# 文学館の常設展が 変わります！



高知県立文学館が変わります。これまでになかったアプローチの仕方で、高知の文学をより分かりやすく紹介していきます。変化のポイントをいろいろな視点でお伝えいたします。

そこで、これまでの展示方法を一新し、誕生、没後周年

にあたる文学者、話題となっている文学者などを精選して取り上げ、関連資料をまとめて見ていただけるようになります。

## 高知の文学の

### 「今」を伝えたい

あわせて、これまで展示してきた文学者を一つのコーナーに集めて、高知には多くの文学者がいるのだということを、インパクトのある展示で紹介できるようにアイデアを出しているところです。

山本一力さんのように、現在活躍している作家も多くいます。そのような人を紹介するコーナーを新設し、今まで作られていました。

これまでの常設展示は、古典から現代までの高知県出身文学者を一挙に紹介するため、かぎられた関連資料しか展示できませんでしたが、「一人の文学者の資料をまとめて見てみたい」「もっと深く知りたい」というお声が寄せられていました。

そこで、これまでの展示方法を一新し、誕生、没後周年にあたる文学者、話題となっている文学者などを精選して取り上げ、関連資料をまとめて見ていただけるようになります。

### 世代をこえて文学に 親しんでもらうために

また、子どもも楽しめる展示を目指し、簡単な表現で絞り込んだ内容の解説文、イラストやイメージ写真を盛り込んで見る人の興味を引きつける工夫をしていきます。昔話や児童文学を取り上げるコーナーも検討しています。そして、高知の誇る作家・宮尾登美子さんから一括寄贈を受けた資料を展示する「宮尾登美子寄贈記念コーナー」を設ける方向で動いております。宮尾登美子さんの資料がこれほどまとまって見ることができるのは高知県立文学館だけです。

当館常設展は、平成9年の開設時に設計されて以来9年間基本的に部分は変更されずに展示されてきた。その展示は、非常に優れた素晴らしいものではあるが、展示された文学者が約40人とも多いことや、内容が少し高尚過ぎることなどから繰り返し来館される方は非常に少ない現状となっている。

そこで、今年度から指定管理者制が導入されたことや、来年度が開設10周年に当たることなどから常設展をリニューアルすることとした。

### 館長室から

#### 常設展のリニューアルについて

前田 英博

(学芸課／間城彩佳)

現在このような視点に立ち、最終的な詰めに入っているところであるが、年々厳しくなっている予算の中、また限られた人材の中でのリユースであり、追いつめられ窒息しそうな状況になっている。

3月中には、新しい展示構想をまとめ上げ、藤並の森が蟬時雨に包まれる頃までには、新しい常設展示を完成させたいと考え、職員が一丸となつて取り組んでいるところである。

## 特別寄稿

## 常設展のリユースに思う——高橋 正

高知市の中心、藤並の森の郷土文化会館が衣替えし、高知県立文学館として新しくスタートしてから今年で一〇年目になる。高知県立文学館の最大の特色は展示内容の豊かさ——つまり、展示対象となる高知出身の近・現代文学者の数が、他県と比べて格段に多い点であろう。

大雑把に列挙してみる。民権派文学——中江兆民・植木枝盛・坂崎紫瀬・宮崎夢柳、社会派文学——大町桂月・田岡嶺雲・馬場孤蝶、評論文学——大町桂月・田岡嶺雲・タカクラテル・楳村浩、大衆文学——黒岩涙香、森下雨村・田中貢太郎・浜本浩・田岡典夫、私小説・隨筆文学——大町桂月・寺田寅彦・田中英光・田宮虎彦・上林暁、女流文学——大塚楠緒子・小山いと子・大原富枝・倉橋由美子、詩歌文学——橋田東声・北見志保子・岡本弥太・大江満雄・片山敏彦・若尾瀬水浜田波静、その他——大塚雅春・宮地佐一郎・清岡卓行・土佐文雄らがいる。現役作家では安岡章太郎・嶋岡辰・笛山久三・志水辰夫・河野典生・山本一力・坂東眞砂子・宮尾登美子・中脇初枝らが目白押しである。



(元徳島文理大学教授)

総花的にならざるを得なかつた。それでも展示し切れない、苦労して集めた貴重な資料が書庫で大量に眠つたままという残念な状況で推移してきた。

今年は開館一〇周年ということで、館の方で常設展の大規模なリユースが計画

されている。まずは総花的大量展示をやめて、ローテーション方式を採用、資料を精選して、ある期間毎に展示作家を入れ替える

とか、子供を視野に入れたわかり易い展示、子供用展示室の新設、宮尾登美子寄贈資料展示室の特設、また、館の敷居をより低くし、大衆性を重視した、人の出入りし易い、動きのある文学館を目指すという。いずれも大変結構である。大いに期待したい。

# 常設展虫ぬがね

**岡本弥太（一八九九—一九四二）**

「南海の宮沢賢治」——いつし

か岡本弥太はこう呼ばれるようになりました。

中で詩作を続け、「九三〇」  
（昭和五年）、中央詩誌

「詩神」に投稿した詩が「新人欄」に掲載され、中央詩壇へのデビューを果しました。そして、「一九三三」（昭和七年）に生前唯一の詩集『瀧』を発行し、中央詩壇でも高い評価を受けました。

『瀧』の中に収められた「瀧」は、高村光太郎揮毫の詩碑が弥太の生まれ故郷香南市香我美町岸本の月見山麓に建っています。そして文学館常設展には、弥太自筆の「白牡丹図」の額が飾っています。

「白牡丹図」は、高村光太郎揮毫の詩碑が弥太の生まれ故郷香南市香我美町岸本の月見山麓に建っています。そして文学館常設展には、弥太自筆の「白牡丹図」の額が飾っています。

▲ 詩碑になった「白牡丹図」の自筆詩額

※1 榛林二九二三（昭和八年十一月）  
※2 「宮澤賢治追憶」一九三四（昭和九年一月）  
※3 「イーハトーヴォ」創刊号  
（一九三九（昭和十四年）十一月）



僕はいま創作心がいっぱいに光ります。  
おかもと やた  
弥太二六歳の頃、町の古本屋で賢治の詩集『春と修羅』に出会います。その当時の感動を「今から思ふと宮澤賢治の影響が多分にあつたと思ふ。(中略) 春と修羅の原本を手に入れて無聲哭しながらされた記憶も生々しい」と『楚歌春秋』につづっています。

弥太は賢治に関して「隨想のノート」（※2）、「春と修羅の我が思ひ出」（※3）といった文章を残しています。弥太と賢治に直接の交流があつたわけではないようですが、この『春と修羅』という一冊を持っていることで弥太は「有縁以上のこゝろの縷り」を感じていたのでした。

文学館の常設展は、開館当初から必然的にこれだけ多くの作家を対象とする高知の



## 文学青春の碑——馬場孤蝶と島崎藤村—— 猪野 瞳

今も昔も熱していく文学青春というものは変わぬものではないだろうか。島崎藤村が馬場孤蝶をたずねて高知へやつて来たのは一八九三(明治二六)年二月下旬だった。

島崎藤村二歳、馬場孤蝶は三つ上の二十四歳、ともに東京の明治学院で知り合った仲だった。島崎藤村は北村透谷、平田禿木、戸川秋骨らと同人誌「文学界」を起したばかりだった。藤村はその新しい文学にたちむかうばかりだったまま、高知に戻り、高知共立学校の教員になっていた馬場孤蝶のところへきたのだった。

当時新しい言葉として恋愛がはやり始めていたが、その恋愛と文学を二人は語りあつた。そこが二人にとっての明治文学青春の地となつた。翠園横の石疊の小坂を上ると右手に鷹匠公園、その前をゆつたり鏡川が流れ、その向かいには筆山がある。



▼「孤蝶 藤村文歎の地」碑

その鷹匠公園に馬場孤蝶文学碑があり、孤蝶筆跡の「輪ノ皎月中天ニ輝クヲ見タリ」がほりこまれ、その百メートルほど左手の道沿いに「孤蝶藤村交歎の地」「明治二六年二月この宿で孤蝶藤村風雅を語る」という副碑が建っている。孤蝶

藤村交歎の地」「明治二六年二月この宿で孤蝶藤村風雅を語る」という副碑が建っている。孤蝶没後五十年目に建てられた。

この藤村の熱氣におおられるように孤蝶は半年後に上京、「文学界」に参加していく。やがて

詩人、作家、評論家、翻訳家として明治文壇の重鎮になつていく。一八六九(明治二)年、高知市金子橋に生まれた。兄の馬場辰猪は自由民権運動家であり、イギリス留学から帰国後、ときの政府に追われるよう渡米、フライデルフライアで客死した。金子橋の稱明寺の正面前に「馬場辰猪誕生地」碑が建つてあるが、そこが孤蝶、馬場勝弥の出生地だった。

のちになつて藤村は「春」をかき、そのなかに明治二十年代の明治文学青春群像をちりばめた。島崎藤村、北村透谷、平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶らをモチーフとした作品であるが孤蝶はモチーフ足立でてくる。「西の方からやつてきた旧友の足立」「足立はこれまで伊予の方のある私立学校に奉職していた」と場所を伊予にかえていながら、藤村にとって孤蝶は明治文学の青春をともに荷つた重要な仲間だった。

孤蝶はゴーリキー、トルストイ、ツルゲーネフ、チエーホフ、モーパッサンほか多くの外国文学を英訳から訳し、「明治文壇回顧」などの名著も残した。鏡川のほとりにたつとき、スケールの大きかつた文学者馬場孤蝶の青春が碑とともにしのばれる。

(詩人)

## 常設展虫ぬがね

### 上田秋夫(一八九九—一九四二)

うえた あきお

常設展に展示されている作家のなかで、積極的に渡欧し独自の清雅な詩の世界を形成した詩人です。

とりわけ上田秋夫は、一九一八(昭和三)年九月にフランス語で不自由なまま自身パリに渡り、体調を崩して帰国するまでの一年3ヶ月を作家ロマン・ロランや詩人マルセル・マルチネらと交流してその思想や高潔な生き方など、様々な薰陶を受け、

詩人の「自存」の道を切り開きました。帰國後、マルチネ著「マルチネ詩選」、ロマン・ロラン著「ミケランジェロ」などを翻訳出版し、自身も感想集『氷花集』を刊行します。また、昔から折にふれ自己流で描いていた絵といくつかの詩による「詩画展」を数回開催しています。

『ジャン・クリストフ』で知られるノーベル文学賞作家、ロマン・ロランとは、一九二六年(大正十五)年一月に彼が危篤であるとの新聞記事を見てお見舞いの電報を出し、

文学館には、ロマンやマルチネから送られた書簡が収蔵されています。その中でロマンは「自分が『春』であることを知らない、親しい友達が『春』であることを知らない」と語っています。

上田秋夫と片山敏彦は西欧文学に惹かれ、にも打ち克たせた」と語っています。『愛すべき秋』よと上田秋夫に語りかけています。当時の一人の温かな交流の様子が伝わってく、貴重な資料です。



▲ ロマン・ロランからの書簡



## 資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

### 『寺田寅彦 妻たちの歳月』

二〇〇六年九月 A5版 三六二頁  
山田一郎著 岩波書店



寺田寅彦に関する山田一郎さんの最初の著作は『寺田寅彦覚書』岩波書店「九八年」で、これは一九七八(昭和五十三)年秋から年末まで百五回にわたる同題名の「高知新聞」連載に筆を加えたものでした。その後『藪柏子集』の研究一続『寺田寅彦覚書』高知市民図書館一九九七年『寺田寅彦の風土四冊目』の著作として本書が出版されました。

この本も九三(平成五年)春から秋にかけ九十回にわたって『高知新聞』に連載されたものが原形となっています。作者の山田一郎さんは「歳月後語」の中で「...『覚書』は高知市東久万の寺田家墓地を描くところで終っているが、今回はその墓地を訪れるなどを発端にして、寅彦の母龜、最初の妻

寺田寅彦に関する山田一郎さんの最初の著作は『寺田寅彦覚書』岩波書店「九八年」で、これは一九七八(昭和五十三)年秋から年末まで百五回にわたる同題名の「高知新聞」連載に筆を加えたものでした。その後『藪柏子集』の研究一続『寺田寅彦覚書』高知市民図書館一九九七年『寺田寅彦の風土四冊目』の著作として本書が出版されました。

夏子、次の妻寛子、三度目の妻紳という女性の肖像を描くことで、寅彦の人生を考えみてようと思ったことから始まっている。...とその意図を述べています。特に三度目の妻紳についての記述は、初稿では九回連載のうち十回に止まっていますが、本書では大幅に加筆し本文三五八頁のうち一三八頁と四割近い紙数を費やしています。また同じ「後語」の中でもこれまで「...自分に課していた寺田家の禁忌を破ることで、寅彦とその一家と一族の悲劇を書くことを決心した。各家にどうては私事であり、秘事である事柄を公けにすることが許されるのか。...」と作者としての思いの一端を述べています。

本書では、寺田家と関わりを持つ多くの人々の証言、書簡・隨筆などの資料をもとに母と三人の妻が描かれ、これの照射として寅彦の実像がリアルに映し出されています。

受贈報告（平成十八年九月～十一月） 敬称略

▼風の会・きのう今日・そして明日 風の会編

風の会他 ▼高知ベンクラブ・わが戦争体験の日々往時を生きた89人の記憶－わが戦争体験の日々編集委員会編

高知ベンクラブ ▼藤本知子・いろり夜話「柴巻の龍馬」市原麟郎作・

藤本知子絵 高知市教育委員会 ▼岩波書店・

寺田寅彦 妻たちの歳月 山田一郎著 岩波書店

書店 ▼林亮・記憶1971年 林亮著刊

▼萱野笛子・詩集「花車草紙」萱野笛子著刊他

▼伊藤博子・伊藤大詩集 伊藤大著 伊藤博子

▼嶋岡晨・(句集)孤食 嶋岡晨著 猫の会

▼渡辺智恵・爪 渡辺智恵著刊 ▼沢英彦・紫

の海沢英彦 沖積社 ▼西岡寿美子・北地

わが養いの乳・西岡寿美子著刊 ▼たむらちせい

(句集)絵心経たむらちせい著 蝶発行所

▼寺田寅彦記念館友の会・寅彦研究「櫻」(合本

第5集) 寺田寅彦記念館友の会編刊

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料を寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

今春開催！「夏目漱石—漱石山房の日々」展

次回企画展案内



日本近代文学館 提供

平成19年4月8日(日)～5月20日(日)

高知県立文学館 企画展示室にて

観覧料：550円(予定・常設展含)

夏目漱石は日本を代表する文豪で、

「吾輩は猫である」「坊っちゃん」

「三四郎」「門」「こころ」など、多

くの作品を残しています。昨年は

「坊っちゃん」発表百年にあたり、

ゆかりの地である松山では多くの

イベントが開催されました。また、

今年は夏目漱石生誕一四〇年にあた

り、「これを機会に、文豪・夏目漱石の

横顔を紹介いたします。

〈漱石山房〉とは、漱石が四十歳

から晩年まで過ごし終の棲家となつ

た早稻田南町(東京都新宿区)の自宅

書斎のことです。この〈漱石山房〉から

数々の名作が生み出されました。

一四五(昭和二〇)年の戦災で山房

は焼失しましたが、残された写真や

遺品で当時の様子をうかがい知ることができます。

そして漱石は、この〈漱石山房〉で

文学作品のみならず、多くの書画も

ほとんど時間の時間をこの書斎で過ごし

たという漱石ですので、名作がつくられ

た背景が、〈漱石山房〉の様子から読み取っていただけるのではないでしょうか。

ほとんどの時間をこの書斎で過ごし

たという漱石ですので、名作がつくられ

た背景が、〈漱石山房〉の様子から読み

取っていただけるのではないでしょうか。

たという漱石ですので、名作がつくられ

た背景が、〈漱石山房〉の様子から読み

取っていただけるのではないでしょうか。

たという漱石ですので、名作がつくられ

た背景が、〈漱石山房〉の様子から読み

取っていただけるのではないでしょうか。

生み出しました。このような自筆書画も展示いたします。

また、〈漱石山房〉には若い文学者たちが多く集まりました。東京帝國大学のほか松山や熊本でも教師として教壇に立った漱石には、彼を慕う多くの教え子があり、毎週木曜日は彼らと漱石の談話会【木曜会】が〈漱石山房〉で開かれました。この弟子たちも〈漱石山房〉を彩る重要な登場人物です。なお、高知県出身の地球物理学者であり随筆家である寺田寅彦は、漱石門下の中でも最初期の人物であり、漱石からその表現力を他人には出せないものだと言われました。寺田寅彦と漱石のつながりもご紹介いたします。

ほとんどの時間をこの書斎で過ごし

たという漱石ですので、名作がつくられ

た背景が、〈漱石山房〉の様子から読み

取っていただけるのではないでしょうか。

企画展  
案内

特別企画  
**「倉橋由美子 人と文学」展**  
**平成19年1月14日(日)～3月25日(日)**

(※会期中 休館日なし)

場所：文学館 企画展示室 観覧料：550円（常設展含）

平成17年に亡くなられた、高知県出身の作家 倉橋由美子さんを偲んでの追悼展。ご遺族が所蔵されている、直筆原稿や創作資料、遺愛品などの中から、厳選した約300点を展示し、倉橋さんの文学的業績を、人・文学・倉橋由美子さんを偲んで・倉橋さん、土佐を語るのコーナーで紹介いたします。



## 関連企画

- ・**自作を読む(ビデオ上映)** 平成19年2月10日(土)、3月11日(日) 各日とも午後2時～  
場所：高知県立文学館 2階ロビー 参加料：企画展観覧料が必要（但し、2割引）  
参加方法：当日、会場に直接おこしください。
- ・**朗読げき「新訳 星の王子さま」～ぼくだけの花をさがしに～** 平成19年2月11日(日) 午後2時～  
場所：高知県立文学館1階ホール 入場：無料（企画展を観覧する場合、観覧料は2割引）  
申し込み方法：お電話にてお申し込みください。（TEL：088-822-0231）
- ・**朗読の集い「倉橋由美子の世界」** 平成19年2月17日(土) 午後2時～  
場所：高知県立文学館1階ホール 入場：無料（企画展を観覧する場合、観覧料は2割引）  
参加方法：当日、会場に直接おこしください。
- ・**倉橋由美子さんを語る** 平成19年2月18日(日) 午後2時～  
場所：高知県立文学館1階ホール 参加料：企画展観覧料が必要（但し、2割引）  
申し込み方法：ハガキ・お電話にてお申し込み後、当日会場にお越しください。

**「夏目漱石—漱石山房の日々」展**

場所：文学館 企画展示室 観覧料：550円（予定・常設展含）

夏目漱石が40歳から晩年まで過ごした自宅書斎（漱石山房）。

多くの遺品、自筆原稿、書画と、（漱石山房）にかかわりのある人々を紹介いたします。

平成19年4月8日(日)

平成19年5月20日(日)

(※会期中 休館日なし)

※休館日：年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。

## 活動報告

**紙芝居活動で  
感謝状をいただきました！**

高知県立文学館 語りと紙芝居の会が行なっている  
紙芝居公演に対し介護老人保健施設「とさやまだ  
ファミリア」より感謝状をもらいました！

語りと紙芝居の会…月1回定例会開催中。  
会長は土佐の民話でお馴染みの市原麟一郎先生。  
随時会員募集中！



語りと紙芝居の会会員のみなさん

## 利用案内 基本データ

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）

休館日 なし

観覧料 一般 350円

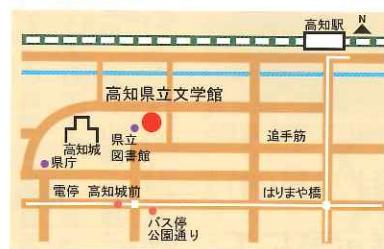
特別企画展のあるときは、料金が変わります。  
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県  
及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、  
療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆  
者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。  
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

駐車場 なし  
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」  
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

## 交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850  
高知市丸ノ内1丁目1-20  
電話 088-822-0231  
FAX 088-871-7857